

指導計画を子どもの遊びに実践化するーその4

子どもの経験の軌跡を捉えるためにー試論

松村和子
(文京学院大学)

1. 研究の目的

保育学会において今まで3年間にわたり、保護者や地域の人々に開かれた保育の成果を『見せる』という行事への取り組みを、運動会における年長児のオペレッタを例として取り上げ、保育者の提案した活動であっても、『一斉』や『練習』ではなく、いかに子どもたちが主体的な日常の遊びや活動の中に取り入れて、さらに『見せること』における完成度も高めることが出来るかを考察してきた。1年目には、年長になってからの長期の指導計画の中で、配慮すべき点を吟味し、2年目には、表現としての『歌う、踊る』という当日の完成度(観客から捉えられること)や達成度(当事者である保育者や子どもたちから捉えられること)をその3者の視点から評価・分析した。さらに3年目には、当日のパフォーマンスは、表現としての『歌う、踊る』ということの完成度だけでなく、たとえば「個性をたいせつにする」といった抽象的な園の保育理念・教育目標がどのように子ども達に育っているのかが顕在化して捉えられる機会となること、だからこそそごろの保育活動の配慮が必要なことを考察した。逆に言えば、抽象的な保育理念や教育目標は、毎日の子どもの活動に具体化され積み重なってこなければ、このような行事の際に顕在化されて保護者にも捉えられるものにはならないといえよう。

このことは同時に、園の保育理念や教育目標に基づく毎日の保育の営みが、確かに子どもたちの経験や学びになって、子どもたちの発達に寄与していることを私たち保育者側は随時検証しなければならないし、折々に保護者にも伝えなければならないということを意味している。つまり、自分たちの保育の説明責任をどのように果たしていくかということである。保護者や地域の人々には、運動会や発表会の活動を「よく出来た、出来ない」と結果として評価しやすいが、本当に大切なことは園の保育理念がいかに具体的に子どもたちの実際の姿に生きているかを伝えることではないだろうか。すなわち、入園希望者や地域の人々へその園の保育理念を掲げ、教育課程を開

示して、「このような保育をして、このような子どもを育てます」という契約をしたときに、その結果を具体的に説明できなくてはならないと考える。鼓笛隊、リトミック、組み体操など練習の成果を保護者に披露できるもの、またはスイミング、文字ワークブックなど目に見えて、「ここまでできるようになった」という成果が確認できるものであるならば、その成果の発表でよいかもしれない。しかし、多くの園では、そのような知識や技術の進歩ではなく、もっと抽象的な保育理念や目標とする子ども像をもって、たとえば「思いやりのある子ども」「協力できる子ども」「自分の力で行う子ども」などを育てたいと謳っているのではなかろうか。

今回の研究では、このような抽象的な保育理念・教育目標のもとに、子どもたちが何を経験し、あるいは何を学んだかということを検証するために指導計画を手がかりにすることを試みる。

2. 研究方法

- 1) 私立U幼稚園における2001年度入園児の3年間の園生活の参与観察
- 2) 指導計画の検討
- 3) 2003年10月年長組オペレッタ分析
- 4) 担任チームとの面接 2003年12月

3. 結果

- 1) オペレッタに対するねらいと保護者の評価

2003年10月のオペレッタは、担任チームがオペレッタの音楽的身体的表現に関するねらいのほか、この園の保育理念である『自発性を育む』という目標を具体化させるべく意識して臨んだ。『自発性』というのは、抽象的な概念であり、どのようにしたら子どもたちの生活の中で具体的に育んでいけるかが課題となる。担任チームはこの学年の中に年少組の時から集団の中で動いたり、発表会で観客の前で演じたりすることが苦手な子どもが何人かいたので、この『自発性』を具体的には今回のオペレッタという年長組ならではの大きな活動において、子どもたちが無理なく参加し、観客の前で演じる自信を持つというねらいにしたのである。そのため、今年度は、特に子どもたち自身で考えたふり

つけや自分たちで作れる衣装・小道具などを中心に行うことにした。そのため、年中組の保護者からは、「今年は地味ですね」という感想が聞かれたほど見た目の華やかさは無かったが、当事者である年長組の保護者からは、「自分たちで動けていたから良かった」と、担任チームの意図を察したかのような感想が聞かれた。

2) 指導計画の検討

あらかじめ日時の決められた行事についての指導計画の月案レベルでは、もちろん子どもたちの様子やねらいなども含まれるが、行事の前後の段取りのためのスケジュール表という役割が強くなり、振り返りも自分の学年だけでなく、他の学年との関係や進行についての大きな枠組みの記述が多くなる。逆に日案レベルでは、活動後のチームミーティングで活動の内容や援助の仕方などを振り返り、次の日につなげていくので、活動の展開の仕方に焦点が当たりやすい。例えば、オペレッタの歌の紹介の仕方や小道具を作るコーナーの出し方など話し合われていく。一方、個人の変化は個人記録に毎日記されていく。

しかし、今年度の9、10月の週案を検討してみると、オペレッタの紹介から当日までの振り返りの欄に、いかに「やらない、やりたくない」という子どもたちが自発的にかかわれるところを作っていくかの工夫が随所に記述されており、そこに苦労していることや担任チームの関心の高さを読み取ることが出来る。

4. 考察

以上のことから、当日のパフォーマンスに向けてオペレッタの音楽的身体的表現としての完成度を高めるといふ表に見えやすいねらいと、『自発性を育む』という3年間を通しての抽象的な保育理念を具体化しようとするねらいが同時に進行している中で、担任チームが意識せずに指導計画の機能を使い分けて記述していることが推察される。すなわち指導計画には、次の3つの機能があり、とくに『何が出来るようになったか』ということではなく、子どもが『何を体験して、何を学んだか』という軌跡をたどるには、週案を活用することが有効ではないかと思われる。この3つの機能は、長期のまたは短期のどのレベルの指導計画にも含まれるものであるが、保育の説明責任という点からは、特に子どもの経験や学びの軌跡をたどるといふ機能を意識して持っていたと考える。

普段われわれ保育者が作成している指導計画に

は次の①、②の二つの機能があるが、さらに③のような機能を持たせるを試みたい。

① 活動準備のための指導計画

1年間の長期の指導計画や短期の日案にしても、行事予定、もしくは保育者側から提案する活動のプログラムという側面があり、活動のねらいや子どもたちに経験して欲しいこと、配慮すべきことなどが盛り込まれてはいるが、保育者が活動をもれなく遂行していくための準備の計画、あるいはタイムスケジュールのような機能をもっている。

② 仮説としての指導計画

前者が保育者が提案する活動のための計画であるならば、②は子どもたち自らが展開する活動を捉えて、こう発展するだろうと予想しながらねらいや活動内容をさだめ、環境を構成するための、いわば子どもの側に立った指導計画である。週案、日案では特に保育後の振り返りがポイントで、仮説であるからには、それが実際にはどのように展開されたが振り返られなければならないが、往々にして活動内容や援助の仕方がどうであったかということから次の活動の展開に進むので、そこから帰納される子どもの経験や学びについては詳しく記述されにくい。

③ 子どもたちの経験・学びの軌跡としての指導計画

指導計画の記述を工夫することで、子どもの経験や学びの軌跡を検証する機能を持たせることが出来るのではないかと考える。それには、月案のように期間が長く振り返りに時間がかかるもの、また日案のように細かく即明日の保育をどうするかといった現実的な指導計画のレベルではなく、週案のように客観的に自分たちの活動を振り返る適度な時間と距離感があることが役立つだろう。活動の展開の状況と同時に、そこで子どもたちに何が経験され、学びとなっているのか、また抽象的な園の保育理念や教育目標がどう具体化された形で子どもたちに経験されているのかといったことを意識的に振り返ることが出来る。

先に述べたように、園の保育理念や教育目標を地域に開示して、その結果を説明する責任に答えるために、どのような手立てが必要かを指導計画の記述を含めて今後具体的に考えていきたいと思う。

参考文献

- 小田豊・神長美津子編著「教育課程総論」
北大路書房 2003年
磯辺裕子「教育課程の理論」萌文書林 2003年